
鷹の爪

NormalSlime

キエエエエエエエエアアアアアアアシャアベッタアアアアアア!!!!

入学偏 - - - - - 1

「――それでは、これにて入学式を終了します」

生徒会長がそう言ってお辞儀をすると、大きな拍手と共に教師が壇上に上がった。

「――えー、それでは保護者の皆様並びに新入生の皆さん。この度は真におめでとうございます。それでは、今後の予定について説明いたします。保護者の皆様は、生徒達が退場した後のご退場とさせていただきます。ご了承下さい。新入生の皆さんは、在校生が全員退出したらそれに続いて《グロリー》から順番に退出をして下さい」

教師が頭を下げ、壇上から降りた。その合図を皮切りに、在校生が一斉に立ち上がり体育館から出て行く。特に緊張した様子等はなく、楽しげに笑う声が漏れてくる。

それを聞きながら、黒爪^{クロツメ}昂^{スバル}は一人溜息を零した。やっと終わった。そう息をつく暇も無く急ぎ立てられるようにして、立ち上がる。規則正しい列を作つて、余所余所しく退場していく。

自分の前の生徒を見ると、どれもこれもが自信に満ち溢れた目をしていた。それもそうだろう。《グロリー》の生徒達は、全て将来が約束されたエリート達。それに一步遅れているという感じが、決して落ちこぼれてはいないのが、《サーティン》。

そして――。

昂はチラリと自分の周りにいる生徒を見た。別段、絶望していたり暗い訳ではないのだが、前に行く生徒達と比べると何処か、垢抜けた感じがしている。キツチリとした雰囲気は無く、どちらかというところがさつな感じがする。その中に、昂は居た。

昴が入学した、国立風宮学園では生徒の実力に合わせてクラス分けがされている。《グローリー》、《サートイン》。そして、最も下級のクラス《ウィード》。昴は、この《ウィード》に属している。クラス分けされたからどうだという事ではないのだが、やはり今までの雰囲気を見ていると、上下関係があるようにも感じられた。

勿論、不良だからという訳ではなくただ単純に実力でクラス分けされた結果なのだ。だから、下級のクラスでも、真面目で努力家の生徒はいるし、はたまた《グローリー》でも才能だけでやっている性格の悪い生徒もいる。

昴はどちらかといえば前者なのだが、昇格に興味があるわけでもなかった。

「何か、胃が痛む……」

これからの学園生活を想像すると、昴は少し憂鬱な気分になった。自分から望んでこのクラスに入ったとはいえ、《ウィード》を告げられたときからある程度の覚悟はしていた。謂れもない非難で、難癖を付けられるぐらいは日常だと思っておかなければならない。

《グローリー》のほとんどは、中等部でも成績優秀だった奴ばかりだ。決して、全てが当てはまるわけではないだろうが、高飛車で傲慢な生徒がいない訳が無い。

そんなような事を考えながら列を成して歩いていく。

——暫くすると、列がまばらになっていく。この辺りからはクラス毎に教室を分かれていく。昴は同じ《ウィード》のクラス証をつけた生徒の波の中に紛れていく。

押されるようにしてクラスの中に入る。

流石は、全国でも有数のクラッドが集まる場所である。内装は普通の学校と比べて、かなり良質である。何処もかしこも、徹底的に管理されていて塵一つ見当たらない。純白の粉をあたりに撒き散らしたかのように真っ白である。

（凄い……。ここまで完備されてる学校も珍しいな。どれどれ――）

昴は一度目を閉じて、薄く開く。そのまま、教室の中を見渡す。歪んだ景色に、僅かに見える色のついた波紋。今の昴には既に周りの人間はすっかりとした、形を持っていなかった。見えるのは、それぞれの物質が持つ、魔力。

（うん、耐久力もそこそこあるな）

一通り見渡すと、昴はもう一度目を閉じる。そして開けたときにはいつもの風景があった。そして、いつの間にか、昴以外のほとんどの生徒は自分の席を見つけて座っている。昴は周りから見れば、ずっとこの教室を凝視してただけだ。当然、一人だけ浮いている。

楽しいな会話こそ少ないが、周りでは新しい友達を作ろうとそこかしこで会話が生まれていた。

昴は慌てて、時間を見る。

「そっといえば、HRがあつたんだっけ……」

制服のポケットから、入学時に貰った出席票を取り出す。そこには、全員の生徒の座席や出席番号などが記載されていた。

昂は自分の席を探す。直ぐに名前は見つかった。比較的前列の、左端の席だ。心の中でガツポーズをする。こういった席は一番、勉強に取り組みやすい。真ん中の席のほうが見やすいのだが、隣がいるとどうも集中出来ない。その点で言えば、多少見づらいがこの席は上々の場所だった。

昂は早足で席に着く。座席は横一列で一続きの長テーブルで、一定の間隔で席が並べられている。隣には誰か生徒が座るのだろうが、必要以上話をしないようにして、壁のほうを見ていればそこまで問題ではなかった。

昂の隣はまだ空席だ。ぼんやりと時計を眺めながら、教師が来るのを待つ。

すると、後ろからポンポンと肩を叩かれた。

「よっ！」

入学偏
-
-
-
-
-
-
2 (前書き)

キイイイイイエエアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアツツツツツツツツツ

ッ!!

イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
 イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
 アアアツツツツツツツツツツツツツツツツツツツ
 シヤベツツタアアアアアアアアアアアアアアアア
 アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
 !!!

入学偏・・・・・・・・・・2

「よっ！」

「えっ？ あ、よう？」

突然話しかけられたので、昴は驚いて間抜けな返事をしてしまった。振り向くと、そこに居たのは自分と同じ制服を身に纏っている男子生徒。少し細めの狐眼とツンツンと跳ね散らかっている金髪が特徴的な男子だった。その顔には似合わず、人懐っこそうな笑顔を浮かべている。

昴はじつと静かにその男子生徒を見つめていたが、それに戸惑っている男子生徒を見て自分の中で一つの答えを出したのか、ふつと笑顔になる。

「こんにちは。今日から、入学してきた黒爪昴です。よろしく」

「お？ おう！ 宜しくな。俺は錦戸ヒューストン拓也。イギリス人と日本人のハーフだ。名前は長いから、拓也でもヒュースでもどっちでもいいぜ」

（ああ、だから金髪なのか。てつきり染めたからだと思っていただけ、ハーフだったのか。言われてみれば、何処と無く顔つきも違うしね）

「そうか。じゃあ、宜しくヒュース」

「おう、宜しくな！ 昴！」

その後、昴はヒューズと暫く他愛も無い雑談をしていたが、やがて教師が来るとその口の動きも止まった。

教師が教室の前に立ち、頭を下げた。そして、流麗な字で黒板に名前を書き出す。少しくたびれた感じがする、年配の男性で身長は一七〇そこそこぐらいであろうか。やはり、生徒を統率する教師とだけあって老人ではあるが、体格は良かった。目は皮膚が垂れていて隠れている。

「生徒の諸君、入学おめでとう。わしの名は、ヒノデ ゲンザブロー日出源三郎だ。君達で丁度二〇回目の生徒を受け持つ。担当教科は、《魔法技巧》だ。もし、武器等についての提案や不安、又はメンテナス等において質問があれば遠慮なく聞いてくれ」

源三郎はそう言うと、弱弱しそうに咳をする。

すると、後ろからヒューズが昴の肩を叩き、小声で話しかけてきた。昴は振り向かずに、「何？」と聞き返す。端の席なので目立つことは無いだろうが、初日から教師にめを付けられるのは御免なので、昴は声のトーンういかなり落していた。

「おい、あの爺さん大丈夫かな？ いい身体してるけどさ、目は見えるのか見えてないのか分からねえし、何処と無くモブキャラな感じがするし」

「モブキャラってお前なあ……。一応、教師なんだから大丈夫でしょ」

「いや、でもさあ——」

そう言い掛けたところで、ヒュンツと鋭い音が昴のすぐ近くから聞こえた。咄嗟に顔の位置を動かし、その飛んできた何かを避ける。

次の瞬間、——カッソツとヒューズのおでこにチョークが当たった。チョークはその衝撃で粉々に砕け散った。

「——いつてええええええええ！？ 何すんだこのモブ爺！！」

（モブ爺ってお前なあ……）

昴は心の中で溜息を吐きながら、苦笑いした。そして、脆くも昴の『目立たない』という目標は崩れ去っていった。源三郎はその温厚そうな顔は崩していないし、怒った雰囲気も無かった。

ヒューズが源三郎の投げたチョークで怒っているのを、昴が宥める。元々、話をしていた自分達が悪かったのだ。

「ほら、ヒューズ。止めておけ。これから教師に目を付けられないだろう？ ただでさえ、僕達は『ウィード』なんだ。評価が悪くなったら、何をされるかわからない。な、ヒューズ？ 今は取りあえず我慢しよう。それに、今回は僕達が悪いんだ」

小声でヒューズにそう耳打ちをする。すると、ヒューズは若干冷静になったらしく昴の言葉を素直に受け止めて、ゆっくりと座った。

「わかったよ。昴がそこまで言うなら、俺は何も言わない」

「ああ、それでいいんだ」

（ヒューズはキレやすいと。よし、覚えておこう。ついでに、宥めるのも簡単だと）

「ふむう」

源三郎は愉快そうに昴たちのやり取りを見ていたが、やがて出席簿に目を移すともう一度昴たちの方を見やる。

「錦戸ヒューストン拓也、黒爪昴。君達二人は後で、わしのところに来なさい。個人的に話がある」

そういうと、源三郎はクラスのほうに視線を向けた。

「それでは、HRを始める」

そして、昴たちはその時間中、クラスの生徒からの微妙な視線に苛まれるのだった――。

入学偏 - - - - 3 (前書き)

イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

シヤベツタアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

!!

!!

「——ああああああもう！！ 気に入らねえ！！」

源三郎に職員室に来るように呼び出された、昴とヒューズは広い校内を二人で歩いていった。HRが終わった後、ほとんどの生徒は下校したのだが、予め呼び出しを受けていた二人はこうして、帰らずに職員室へと行かなければならなかった。

ヒューズが未だに怒っているのを見て、昴は苦笑した。恐らく、これ以上は何を言っても無駄だろうと悟ったのだ。

朝のHRの一件は、その場凌ぎに過ぎなかった。それに、無理に説得してヒューズの怒りの矛先が自分に向くのは面倒だった。昴は、特に何かを言わずにさも意味ありげな様に、首肯するだけだった。

「なあ、昴もそう思うだろう！？ たたく、あのモブ爺の奴いきなりチヨークなんか投げやがって……。教師が生徒に暴力振るっているのかよ」

（モブ爺っていう名前はもう固定なんだ……）

「そうだなあ。暴力を振るうのは確かに良くない事だと思うな」

あくまでも、『自分達が悪い』という事実を除いて肯定した。昴は、その後も適当にヒューズの愚痴を受け流しつつ、先を急いだ。

途中、何人かの上級生に遭遇したが、ヒューズの事で手一杯だった昴は挨拶等の行為を一切せずに素通りしていた。当然、怒っているヒューズはそんな事構うわけも無く、時々ぶつかってはヒヤシヤしたもののだが、昴が申し訳なさそうに会釈をすると釈然としない顔

をしながらも、その場は治まっていた。

そろそろ、気苦労で精神が擦り切れそうになったところで、やつと二人は職員室の前に着いた。学園内には様々な施設が揃っているので、驚くほどにその中は広い。

教室から教室への移動も一苦労である。

「ほら、ヒューズ。職員室着いたから、そろそろそのスネてる顔を戻しなよ」

「スネてねえよ！」

「っという冗談は置いて、本当にその不貞腐れたような顔は止めた方が言いと思うよ。ただでさえ、源三郎先生に喧嘩売っちゃったんだし」

「ふんっ。あんなモブ爺なんて臆することねえよ。次、アイツが何かしてきたら返り討ちにしてやる」

そう意気込むヒューズの隣で、昴は一人溜息を吐いた。

（僕が思うに、多分ヒューズじゃ無理だな……）

昴はそう思いながら、職員室のドアを開いた。ノックを忘れてしまったため、いきなり入ってきたように思えたらしい。中に居る教師達が、驚いてこちらを見ているのが昴には感じ取れた。

しかし、それでもめげずに昴は精一杯の愛想笑いで中に居る教師達に声をかけた。

「すみません、ノックし忘れてました。日出源三郎先生はいらっしゃいますか？」

中に居る教師全員に問いかけると、すぐに年配の教師が返事をした。

「中に入って来い。日出先生ならそこにいるぞ」

年配の教師が顎で示した。確かに、その先には源三郎が座っていた。職員室のど真ん中に位置する席に座っているが、どこか様子が変だった。自分から呼んだにも関わらず、入ってきた二人に全く気づいていないようだった。動きがほとんど無い。

「死んでるのか？」

「馬鹿っ」

昴がヒューズの頭を叩いた。

（まったく……。時と場所をわきまえてほしいよ）

「日出先生、一年の黒爪昴と、^{ウィード}錦戸ヒューстон拓也です」

昴が源三郎の前に立つと、ゆっくりとその身体が動き出した。昴の横で、ヒューズが「動いたぞ!？」と目を丸くしているが、特に気にしなかった。

入学偏
-
-
-
-
-
-
4
(前書き)

[illegible]

ヤフウウウウウオオオオオオツツツツツ
ツツツツツ!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!

入学偏 - - - - - 4

「おっ来たか。問題児共」

早速問題児のレッテルを貼られてしまった昴は、げんなりした。こいつと関わらなければ良かったと、横で源三郎を睨みつけているヒューズを見る。だが、今更そうしたところでどうしようもない事は分かりきっていたので、やはり溜息を吐くしかなかった。

源三郎の『問題児』というキーワードに数人の教師が顔を上げ、二人を見ているのが昴には感じ取れた。入学早々そう言われるからには、よっぽどの事だろうという憶測を持っている教師は少なからずこの中に居た。

昴は自分のこれからの楽しいはずだった学園生活を思い浮かばせ、もう一度溜息を吐いた。

「……さよなら、僕の華の学園生活」

「おい昴？」

まるで席を吸い取られたかのような顔をしている昴に、ヒューズが心配そうな声をあげた。

「そう心配するな。それと、錦戸といったかな。いきなりチョークを投げたのはすまなかった。ただ、流石に初回のHRから、不真面目というのは関心しなかったからな。覚えておくと良いぞ。何事も初めだけは全力で頑張れ」

源三郎はそういうと、快活な笑いを上げた。

（それはつまり、最初以外は別に頑張らなくても良いということなんじゃ……）

「おお！ モブ爺、分かってるじゃないか！ 自分から謝るとは良い度胸だなあ。よっしゃ、俺も男だからな。いつまでも小さなことには拘らねえ。許してやるよ」

「ヒューズ、先生に向かってそれは無いだろう……。っていうか、謝るのを良い度胸とは言わないよ……。後、モブ爺の名前で呼ぶのは僕みたいな友人の間か自分の心の中までにしておいた方が良くと思うよって、もう遅いか」

昴はチラツと源三郎を見たが、特に怒っている様子は無く愉快気に笑っている。

どうやら、心が広い教師だったようで、無礼極まりないヒューズに対してもある程度は許容範囲だったようだ。年配の威厳とでも言ったところだろうか、その笑いの裏には不思議な落ち着きを感じられた。

源三郎は一つ息をつく、昴とひューズの両方を一瞥して話し出す。

「面白いな、お前達は。入学早々教師に喧嘩を売るとは余程の馬鹿か、はたまた天性の才能なのか……。まあ、そんなものは追々分かるでしょう。……特に、黒爪昴」

一瞬、普段は閉じられている源三郎の目が怪しく光ったように昴は感じた。まるで、蛇に睨まれたかえるの気分だった。

しかし、昴はそのような感情は一切表に出さずに、あくまでも愛想笑いを続けていた。

「お？ 俺は？」

昴だけが呼ばれたのが不満なのか、ヒューズが源三郎を問い詰める。

だが、源三郎はすぐに楽しそうに追い払うようにヒューズに手を振ると、

「お前は只の馬鹿だ」

「ぬあああんだとおおお！？ くそ、モブ爺！ やってくれるじやねえか！」

ヒューズが大声で叫ぶ。その声にまた、他の教師達の注目が二人に集まった。昴は愛想笑いでどの先生にも機嫌を取っておく。

（はぁ……。多分僕って、損をするタイプだな）

「叫ぶな。耳に障る。さて、この馬鹿は放って置くとして。お前さんの方が、まだマシな気がするからお前さんに真面目な話をするぞ」

「まだマシ……。ヒューズと比べられるなんて……」

昴は心底心外だとも言うように、顔に絶望の色を表した。ヒューズはと言えば、相変わらず昴の横で騒いでいるので、どうやら昴が言った言葉の意味をじっくりと考えている暇は無いらしい。

「とにかく、お前らの行為を黙って見逃すわけにはいかないからな。些細な罰だが、一応わしから二人に言い渡す。今度、新入生の間で実践型の実力テストをやる。内容は後日、新入生向けにわしから連

絡するからいいとして、それに錦戸と黒爪のタッグで出場してもら
う事にした」

「「は？」「」

入学偏 - - - - 5 (前書き)

ウヒイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

シャベッタアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

入学偏・・・・・・・・・・5

昴とヒューズは二人揃って、素っ頓狂な声を上げて、顔を見合わせた。すぐにヒューズが源三郎の方に顔を向ける。

「ちょ、ちょっと待てよ。モブ爺、話が見えないぜ？ 実践型のテストって何だよ。それに、俺と昴がタツグで出場だと？ 詳しく説明しろよ」

ヒューズが意気込んで源三郎に詰め寄った。昴は、今源三郎から聞かされた言葉を頭の中で繰り返して再生させる。何処か癢だったのが、話がいまいち掴めないと言うのはヒューズと同じだった。それもそのはず、いきなりズバズバと話を進められても着いていけない。昴も、ヒューズほど突っかかりはしないが、少し訝しげに源三郎を見つめた。しかし、さっきとは違ってかわって、源三郎はもう面倒臭いとも言つように背中を向けた。そして、一つ大きな欠伸をした後は、何の反応も返ってこなかった。

「モブ爺！？ 聞いてんのかよ？」

昴が源三郎に近付くと、静かに小さな音で、源三郎の寝息が聞こえた。

「…………寝てる」

「こんにゃろおおおおお！！」

源三郎の態度にイラついたヒューズが拳を振り上げたが、昴がそれを制止した。本当に、今日何度目かも分からない溜息を零しながら

ら。

「ヒューズ、いい加減にしろ。先生も言ってたでしょ？ 詳しい事は、後日新人生向けに話をするって。なら、それまで待てばいいんだ。今とやかくやって、また目を付けられたらどうする？ ここはあくまでも名門校。不祥事を起こしたら、全力で潰しにかかる。退学もありえるんだ」

昴がゆつくりと諭すようにそういうと、ヒューズは少し唸ってから振り上げた拳を降ろした。

「分かってもらえて、何よりだよ」

「ったく……昴に免じてこの場は治めるけどなあ。お前も、あんまり我慢ばっかしてると、その内身体壊すぞ？」

「ご心配なく。別のことでストレスは発散してるから。ていうか、ヒューズは逆に我慢しなさすぎだから。思ったことを言うのはいいけれど、時と場所と相手を考えて行動した方が身のためだよ？」

「大丈夫、その時は昴が何とかしてくれるだろ？」

（他人任せかよ！）

昴は心の中で突っ込みを入れたが、口には出さなかった。昴はヒューズに声をかけて、職員室をそそくさと後にする。

その頃には、もう校内には目立った生徒の姿は無かった。昴は、初日からのハードスケジュールにほとんど疲れ果てていた。ヒューズは見た目どおり、体力があるのか昴と違って全く気疲れした様子が無い。

（いや、ただ単に能天気だったから周囲を気にしなかった分、僕みたいに疲れてないんだな……）

「昴、これからどうする？」

ヒューズが昴に話しかけた。昴は少し考えた後、ヒューズに手を振った。

「いや、今日は色々と疲れたし帰るよ。また明日」

「ん、そうか。じゃあ、俺も特にやる事ないし帰るわ。じゃあな、マイシスター」

「僕達はいつから兄弟に？ ていうか、シスターじゃ女だし」

そう言った時には、ヒューズはもう既に靴を履き替えて外に出ていた。

すぐに終わるはずの初日が、気づけばあっという間に日が暮れてしまっている。ヒューズは、何となく感じる空しさを押し殺して、一人残された廊下で呟いた。

「あ————帰るか……」

——ヒューズと別れて三十分が経った。

昴は、自分のマンションの前にもう既に着いていた。魔法加工がされている特殊な金属を用いて作られたこのマンションは、金属質な見た目どおり強固な魔法耐久力を誇る。

物理的な攻撃にも幾分耐えられるというメリット付だが、高い家賃のおかげで入居者は部屋数の半分も埋まっていない。しかし、泥棒などという輩に入られることはまず無いし、魔法加工がされているので勉強にも役に立つ。

立地条件も良いし、一人暮らしにはもってこいの物件だったので、昴は迷わずにこのマンションに入居した。

このマンションはオートロックシステムで、入居者の生態反応を察知しなければ開けられない。昴は玄関にあるいかにも硬そうな金属製の扉の前に立った。すると、四方八方はら光のレーザーが放出され、昴の身体のおちこちに当たる。

数秒もすればそれは終わり、重い扉がゆっくりと開いた。昴が扉をくぐって、マンションの豪華なエントランスに入った瞬間、開くときとは打って変わって、もの凄い速度で扉が閉まった。

「いつ見ても恐ろしいなあ。これに巻き込まれたら、怪我じゃ済まないでしょ……」

昴は苦笑しながら、エレベーターに乗り込んだ。全部で五階建てのこのマンションは、一つの階に五部屋、合計二五部屋で作られている。

そのうち、昴の部屋は三階の角部屋だ。この部屋は一番狭く作られていて、このマンションの中で最も家賃が安い。

といっても、一般のマンションの数倍はあるのだが。

昴は、エレベーターから降りて自室の扉を開けた。すると、暗かった室内が一気に光出し、その豪華な室内を照らし出す。

一番狭い部屋といっても、4LDKはくだらない部屋である。昴一人で暮らすには十分というよりも、勿体無いといってもいいほどの広さだ。勿論、昴自身もここまで広い部屋は望んで居なかったのだが、このマンションに住むにあたって、一番狭い部屋なのだから仕方が無かった。

最初に、このマンションの間取りと家賃を聞いたときには、他の物件にしようかとも考えたのだが、貴重な金属に高度な魔法加工がされているともあって、クラッドである昴からしてみれば、格安物件よりも素晴らしい物件なのだ。

昴の部屋の内装はしつかりとしていて、とても明るい。広々としてリビングには、ベランダへ出ることが出来る大きな窓がついていて、そこからは絶景が見れるようになっていた。

昴はリビングにおいてある大型のソファに倒れこんだ。ソファは安物だったのだが、昴が魔法加工で材質変化をさせておかげもあって、極上の寝心地を醸し出していた。包み込まれるような感触に、思わず瞼が落ちてきてしまう。

——その時だった。

ベランダで微かに何かが動いたのを感じた。夜の闇に紛れていた何かが蠢いたのを、昴は見逃さなかった。停止しかけた思考が再び動き出す。

「……………まあ、いつか」

しかし、昴は動かなかった。

このマンションの設備を考えてのことだ。勿論、突破されるとは思っていない。何せ、それを見込んでの入居なのだ。せつかくある設備なのだから、役に立つてもらわなければ困る。

「ふう……。僕の安眠の為に頼むよ……………」

昴はそれだけ言い残すと、再びふかふかのソファ―に顔を埋めていった――。

入学偏・・・・・・・・・・7（前書き）

ウヒイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

ヤメテエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ
エエエツエエエエエエエエツエエエエエエエエエ

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

しゃべってエエエエエエエエエエエエエエエエ
エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ
エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ
エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ

!!!!!!!!!!!!

「――ふぁ……」

どれくらい寝たのだろうか。昴は、壁にかけてある時計を見た。昴の視力は悪い方ではないが、寝起きという事もあって、ぼやけがちに見えた。

昨日はそのままソファで寝てしまったせいか、身体中がズキズキと筋肉痛を訴えていた。昴は、何とか身体を持ち上げて、時計の近くまで行く。

時計は三時を丁度過ぎたあたりを指していた。

「……………あれ？ まだ夜中か。結構寝たんだと思ったんだけど……痛っ！」

背伸びをしようとして腰を伸ばすと、ピリツとした痛みが昴を襲った。

「これからはベッドで寝よう……」

昴は窓の方へと歩いていく。カーテンはずっと閉まっていたので、夜の月の光は入っていないかった。電機は付けっぱなしで寝てしまったようだ。これから寝ようとも思ったのだが、一度起きてしまうと中々寝付けなかった。

昴はカーテンを開けた。特に何をするわけでもなかったが、何もすることが無いからこそ、外の風景をただボンヤリと眺めていたかった。

昴が傍に立って、カーテンを少し開けた。

すると、綺麗な夜空とそこにちりばめられている星が瞬いていた。月は、半分満ちかけている程度。昴は迷わず、窓を開けて外に出た。備え付けのサンダルを履いて、外に出ようと一歩踏み出す。

——もにゅ。

「むぎゅ……」

昴の足元で変な感触が感じられた。どう考えても、ベランダの地面の感触では無い。サンダル越しに伝わる、プニプニとした触感。昴は、僅かながらに足を上げてその何か良く分からない物体を、もう一度足で撫でる様にして踏みつけた。

「うにゅ……むぎゅ……」

踏みつけるたびにおかしな声が聞こえてくる。起きているのか、寝ているのか。暗いせいで顔まではよくわからなかったが、小柄な女の子が昴の足元で倒れていた。昴は、暫くその女の子の事を観察していたが、起きる気配は無く、昴が時々ちょっかいを出すと愛くるしい声で、もぞもぞと動いただけだった。

「——とりあえず、どうしようかこの子」

そもそも、何故こんな小さい子がこんなところで倒れているのか。このマンションは五階建てで昴の部屋も三階だからそこまで高いわけではない。

こういうことに長けている運動神経が良い人間なら、登ろうと思えば登ることも可能だろう。しかし、こんな小さな女の子が登ってこれると思えなかった。

昴は少し考えた後、放置する事にした。

こんなところにいる時点で、明らかに普通じゃない。普通ではないということは、自分害を及ぼす可能性も捨てきれないということだ。

起こさないようにゆっくりと昴は、部屋の中に後ずさりするように戻っていく。そして、部屋の中に入って溜息を吐くと窓を閉めた。

「——おかげさまでまた疲れて、眠気が出てきたよ。有難う」

昴はそれだけ言うと、今度はしっかりとした足取りで自室のベッドの上に寝転がった。ソファよりもゆったりとしたスペースで昴は思いっきり身体を伸ばす。

そして、心の中で自分のスルースキルを褒めながら再び眠りについたのだった——。

入学偏 - - - - 8 (前書き)

ウヒイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ

ポイントオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

イツパイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

ウレジイイナアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

「——起きて——てくださいぁーい!!」

そんな声で昴は目を覚ました。アラームはまだ鳴っていないかったが、時計を見ると結構登校には丁度良い時間帯になっていた。昴はアラームが鳴らないように電源を切ってから目を擦る。二度寝をしてしまったせいで、ぐっすり眠れたという感じはしないのだが、睡眠時間は結構取る事ができた。

昴はストレッチを始める。ストレッチは昴の日課だった。これをする、一日の頭の働きも身体の働きもよくなるし、何より目覚ましには丁度良い。

「——起きてくださーい!!」

「幻聴だよね。うん」

昴は気にせずにストレッチを続ける。

「起きてくださーい!!」

「.....」

「起きてくださーい」

「.....」

「起きてくださーい.....」

「……………」

「起きてー……………」

「……………」

「……………」

遂に、その声が聞こえなくなった。何度呼びかけられたかわからないし、誰から呼びかけられたのかもわからないが、その人物が何処に居るかは特定する事が出来た。昴は、ストレッチを続行する。背筋を伸ばすと、筋肉が次第に解れていくのが感じられた。

「ぐすっ…………ひつく……………」

「何ですすり泣きが聞こえるんだ!？」

昴は耐え切れなくなり、ストレッチも程々に少し早足で窓の方へ歩いていく。カーテンを開けると、そこには一人の少女が立っていた。

やはり、泣いていたのはこの少女だったようで、目が赤く腫れていた。昴は少し迷ったが、この少女を中に招き入れる事にした。

このままここに放置するわけにもいかなかった。

窓を開ける。すると、そこで少女がやっと起きてきた昴の存在に気づいたようで、泣き顔が次第に晴れやかになっていった。

「ほら、入って」

「お邪魔します」

少女はそう言って、履いていた靴を脱ぐと昴の後について上がってきた。歳はいくつくらいだろうか。昴は色々予想したが、身長はそれほど高くないうえに、顔もまだ少しあどけなさが残っているところからして、自分よりも二、三下ぐらいだろうと一人で納得していた。なにせ、泣いていたのだ。絶対ではないが、昴ぐらいの年齢になるとそうそう無く人間はいない。

(……………ん？ 普通に家の中に入れちゃったけど、この子誰？)

昴は少女をソファに座らせ、自分も隣に座った。

「…………で、名前は？ 年齢は？ 何処から来たの？ 何であそこにいたの？」

「あの…………そんな一気に質問されても困るんですけど。まあ、話しますけど…………」

少女は昴の方を向くと、一呼吸置いて話し始めた。

「まず、私の名前は南野^{ミナミノ}月^{ルナ}です。年齢は不詳の国立風宮学園一年生です」

「いや、学年言ったら年齢不詳にしている意味が無いんじゃないか……。つてか、同年齢でしかも同じ学校だったのか。そういえば、見覚えある制服だと思っただよ」

昴は月を改めてよく見てみる。確かに、月は風宮学園の制服を着ていた。自分よりも幼いと思っていたが、どうやら幼児体系な上に童顔だったらしい。童顔といっても、ただ幼いだけではない。それ

はもう、目を見張るほど可愛かった。

それほど異性に興味が無い昂でも、それは分かった。

「何故私があそこにいたのかというところ——」

（あれ？ 僕の突っ込みは無視？）

入学偏・・・・・・・・・・9

昴は少し不満に思いつつも話を続ける月を見つめた。

「さつきも言ったように、私は国立風宮学園に新入生として入学しました。勿論、昨日もしっかりと入学式に出ましたし、《ウィード》の教室で……ええと、お名前は？」

「今更……。僕の名前は黒爪昴。一緒にいたのは、ええと。ごめん、本名は忘れちゃったけどとりあえずヒューズって覚えてくれればいいよ」

「そうですね、分かりました。じゃあ、昴君とヒューズ君が教室で話していて先生に怒られているところも見ました。ちなみに、私は《ウィード》で同じクラスですし気づかなかったかもしれませんが、昴君のすぐ近くの席なので仲良くしてください。

それで、私があそこに居た理由を簡潔に述べれば、このマンションの材質に興味があるからです。これからの勉強に役立てばいいなと思って調べてたんですけど、気が付いたらマンションを登っていません。暗くなってきたから帰ろうと思ったんですけど、良く考えたら私高所恐怖症だったので降りられなくなってしまっ……。

それで、今日に至るんです。この部屋に住んでる人が起きなかつたらどうしよう、私を見て泥棒だと思って通報したらどうしようとか心配していたのですが、昴君で良かったです」

そう言つと、月は話し終えてスッキリとしたのか一息吐いて目を閉じた。その顔はとても、可愛くて昴は一時、月の言葉をあまり考えないで、月を見ていた。しかし、ふっと月が思い出したように昴の方を向くと、昴は慌てて眼を逸らした。

「？　どうしました？　私の顔に何か？」

「い、いや。何でもないよ」

「そうですか。そういえば、私の制服に足跡がついてるんですが何か知りませんか？」

「さあ？」

「そういえば、昨日蟻になった私が人間に踏み潰されたという夢を見たんですが、何か知りませんか？」

「さあ？」

本当は思い当たることしか無かったのだが、昴はあえて白を切った。その顔には、嘘をついている動揺は全く無く、本当に知らないかのような顔をしていた。

というよりも、自分の夢を他人に尋ねても答えようが無い。

それを見て、月は完全に信じてしまったのか「そうですか……」と呟くと、立ち上がった。昴はそれにつられるようにして、月を見上げる。時間は、話をしている内に結構経ってしまったのか、いつも家を出る時間とほぼ同じだった。

「そろそろ行く？」

昴がその声をかけると、月は一瞬思案顔になったがすぐに快諾した。

「そうですね。もう行きましようか。そういえば、いいんですか？」

「何が？」

「いえ、私は貴方のお家に勝手に入ってしまったうえに、図々しくこんなにくつろいでしまつて……」

月が少し不安そうな顔で昴を見つめた。しかし、昴はそれ自体は全くと言っていいほど気にしていなかった。ベランダにいるだけで、部屋の中に侵入してきたわけではない。そもそも、ベランダから窓を破ってくるには、相当の実力が必要なので、ベランダも外もあんまり変わらなかった。

（それに、月はさつき確か言つてたはずだね。このマンションの材質に興味があつたつて。どうやって、このマンションが特別な造りになっているのかを知つたのかは分からないけど、僕がここに入居した理由と似てるし）

「いいんだよ。勉強の為にこのマンションが役立つなら。僕も、そのつもりでこの部屋に入居したんだし。良かったら、また来る？」

「い、いいんですか!？」

何故かキラキラとした目で見つめられてしまった昴は少し照れながらも「うん」と頷いた。

——それから、昴は月をリビングで待たせておき急いで制服に着替えた。ちよつとした事だったが、制服についていた埃を綺麗に取つておいた。

昴は着替え終えて鞆を持つと、リビングで待っている月に話しかけた。

「じゃあ、学校行こうか。それとも、別々で行く？　僕はどっちでもいいけど、どうせ同じクラスなんだし一緒に行かない？」

「あ、はい。ご一緒させて頂けるなら喜んで」

月はそういうと、昴に微笑みかけた。昴は、心の奥で喜びながらも表面上には出さずに、あくまで平然と「じゃ、行こうか」というと、月と一緒にマンションを出て行った――。

入学編 - - - - - 10 (前書き)

う
ぶ
う
お

——月と一緒に学校に登校すると同時に、ヒューズが昴に声をかけた。

「よっ！ 昴、今日も良い天気だな！」

「ああ。なんか、ベタベタすぎる挨拶だけど何故かそれが清々しいね。お早う」

「あ、あのっ……お早うございます」

月が笑顔でヒューズに挨拶をした。ヒューズと月に面識はない。しかし、それでもこうしてしっかりと挨拶する事に昴は関心した。すると、ヒューズは不思議そうな顔をして月を見る。まるで、物珍しい動物を見たかのように月を見た。

「……お前、いつの間にいたんだ？」

「ひ……ひどいですっ！」

流石に、ヒューズの言葉は酷過ぎた。挨拶を返すわけでもなく、何か容姿を褒めるわけでもなく。その存在に気づかなかったただけ。昴は薄々、ヒューズのこういった性格には気づいていたのだが、実際にそれが発揮されると苦笑いをするしかなかった。

これでは流石に月が可哀想だと思って昴がフォローをしようとした時には、既にそこに月の姿は無かった。

「あ、あれ？ 月は？」

「月？ ああ、さっきのちっこいのか。あいつなら、涙目で走っていったけど」

「ああ、そう……。あのさ、ヒューズも程々にな？」

「何が？」

「ごめん。何でもないよ。言っても無駄だよね……」

昴は何故か遠いところを見つめるようにして目を細めた。

普通、こういう時はある程度察しがつくはずだったのだが、どうやらそんな事はヒューズには関係が無かったようだ。

そんな態度が気に入らないのか、それともヒューズが短気なだけなのか、今にも掴みかかってきそうな感じだった。

「言いたいことがあるなら、言えよ。そういう曖昧なのかむしろくしゃすんだよ！」

「いや、何でも。ただ、ヒューズって格好いいなって思っただけ。さ、早く教室に行こう」

「お？ そ、そうか。何か照れるな……」

単純であり、馬鹿である。

空を見た。今日は、快晴。雲ひとつ無い、青い空。昴は生まれてから、ここまで綺麗な空を見たことが無かった。

晴れといっても、大抵は雲が薄くかかっている。ここまで綺麗な

空を見るのはとても新鮮な気分だった。

月に出会った日。初めて純粋な青を見た日。今日、これから一体どんな体験をするのだろうか。

昴は予言者では無いが、今日は何かが起こる気がしてならなかった。

昴とヒューズは下駄箱で靴を履き替え、教室へと向かう。途中、何人かの《グローリー》の生徒を見たが、どの生徒も二人を見るとまるで蔑んだかのような視線を向けていた。

「なあ、あいつら殴っていいか？」

「やめておいたら？ 一応、実力であの地位にいるんだし」

「ちっ……」

（舌打ちは止めた方が……。万が一見つかったら面倒臭――）

「おい、お前何舌打ちしてんだよ」

案の定、近くにいた《グローリー》の生徒に見つかってしまった。昴は心底嫌な顔をしたが、もっと嫌な顔をしたのは以外にもヒューズだった。

てつきり、ヒューズなら喧嘩腰に怒鳴ると思っていたのだが、予想に反してヒューズは目線だけをその生徒に向けた。

「何だよ？ 俺ら、別に何にもしてねえけど？」

ヒューズはそう言うと、「行くぞ」と昴に耳打ちしてその生徒を無視して足早に去っていった。昴はさっさと離れていってしまうヒューズと、突っかかってきた生徒をしばしの間見比べていたが、や

がて控えめに背を向けた。

「……失礼します」

「つつ！ ふんっやはり、『ウィード』は礼儀知らずのクズの集まりか」

生徒はそういうと、憎憎しげに昴を見ながら歩き去っていった。何故、自分がそんなことをと不満に思った昴だったが、早く教室で寛ぎたかった為に、何も言わずにすぐに教室まで走っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2954v/>

鷹の爪

2011年8月15日14時33分発行